

わたしたちが知っているイスラエルとは二種類あります。一つは1948年に米英のお膳立てで建国され、現在もガザ地区に侵攻を企てて大量殺戮を繰り返す軍事国家です。もう一つは旧約聖書に登場するイスラエルです。このイスラエルとはイーシュ・ラ・エールと言い、「神を礼拝する者の集まり」といった程度の自己理解から来ています。このようにイスラエルやユダヤとは民族や人種を指すのではなく、あくまで「共同体」の呼称でした。その共同体も申命記等では律法と細則の目白押しです。つまり逆説的にいえば、枠組みが大変緩やかな「烏合の衆」であったという証拠でしょう。

それでは何故彼らはそんな共同体が必要だったのでしょうか。それはどの部族も単独では生きられない程「弱く・小さく・貧しい」存在だったからです。つまり彼らはすでに乗り遅れていたのです。それは農業を基盤とする国家体制作りからです。長い時間をかけて先住の都市国家群に隷属しつつカナンによく定着し、あこがれの農業に与し始めた途端にバビロン捕囚(B.C.597～同538)に遭ってしまうのです。

そのバビロンの地で初めて共同体構成員同志が会うのです。彼らは捕囚民という制約の中で互いのアイデンティティーの確立に急ぎます。そこで共同体の中からJやEという伝承を持っていた部族の信仰形態を取り込むのです。

これがヤハウエ信仰の誕生です。ここから彼らは出エジプトから始まる旧約聖書群を創り出して行きます(創世記は後年に付加)。それは共同体が一つの過去を共有することにおいて未来を標榜しようという決断でした。

以上のように旧約とはすべてバビロン捕囚以降に編集されました。歴史的には存在しない過去を創造したのです。しかしそれらは単なる作り話ではありません。その目的はバビロン捕囚下にある同胞に対しての慰め・励まし・希望なのです。嘘の羅列ではなく、人は過去を批判的且つ生産的に共有しなければ、現実を恵みとして受け入れられないばかりか次の世代に未来を託すことなど出来ないのです。

本日の箇所はヨルダン川の渡河です。いくつかの部族の体験が下敷きになっていると考えられます。ヨシュア記は言明しませんが、おそらく時は真夜中でしょう。先住民族に発見されないよう闇に紛れつつ急いで渡った慌ただしさが伝わってまいります。渡河の記念とすべき儀式も行わず、ただその辺に転がっている石を記念として積み上げたに過ぎません(4-7)。そして、この後イスラエルが会うのはエリコの町の被差別者ラハブでした。弱く・小さく・貧しい者が川を渡って出会ったのは彼らと同じ弱く・小さく・貧しい者だったということです。

この物語のモチーフは新約のイエスの「ガリラヤ」物語群として用いられています。イエスが出会ったのはいつも弱く・小さく・貧しい者であったことが思い起こされます。そこでイエスが語られるのは「あなたはそのままで愛されているのだよ。」という人生の肯定なのです。

平和とは戦争の結果にもたらされる努力の結果としての褒美なんかではありません。それは弱く・小さく・貧しいという人間理解なのでしょう。その相互理解があってこそ初めて補い合い、赦し合い、愛し合う関係性が育まれるというのが聖書の宣言であり、これが平和の記念なのです。